ギャルゲーの女の子になりました

南はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ギャルゲーの女の子になりました

【Ｎコード】
Ｎ２０１７Ｒ

【作者名】
南はるか

【あらすじ】
あたし（♀）が落っこちてトリップした先は、一般的に『ギャルゲー』と呼ばれるゲームの世界だった。しかも主人公ではなく脇役のハーレム構成員（攻略キャラの一人）　あれ…なんか納得いかない！？　ゲームシナリオの支配する世界で、自分の恋愛フラグ回避に奔走する私と、様々な思惑が交差する同僚の攻略キャラの女の子達と、複数同時攻略を狙うプレイヤー君との、ゆるーい恋愛コメディ。

オープニング（前書き）

基本的にコメディーです。
ハーレム要素も、逆ハーレム要素もありませんので、ご了承ください。
のんびり更新ですが、暇つぶしにでも役立っていただけたら、幸い
（＊、∀、＊）

オープニング

さて。
ことの始まりは、さかのぼる事、数日前。
桜も舞い散り、葉桜が生い茂り始めた、四月なかば。
入学したての公立高校は電車で５駅ほど。
第一志望の私立に落ちた身としては致し方ない。
毎朝のラッシュにもめげず、満員電車から吐き出されたあたしは、遅刻寸前だったこともあり、いつも使うエスカレーターには並ばずに、併設してある隣の階段を駆け上がった。

で…
ズルッと…
運悪く、階段を踏み外して…

落っこちた。

異世界に。

まぁ、それはいい。よくあることらしいし（愛読のラノベ及びマンガ参照）。
ただ、あたし的に問題なのは…
落ちた先が、一般的に『ギャルゲー』と呼ばれるゲームの世界だった、って事だ。

え？

もしかして、あたし…

ハーレム構成員（攻略キャラ）の、一人ですか！？

Chapter1

『転校初日から遅刻なんて、絶対いやぁぁぁーーーっ！』

朝の住宅街に少女の（はた迷惑な）絶叫が響く。
その声に反応した少年は、うっかり立ち止まり…後ろを振り返った。

どぉぉーーーーん！

少女の前方不注意が原因か、少年の一時停止が原因かは…定かではない。

が。

絶叫しながら全力疾走していた少女は、少年と正面衝突してしまった。
想定よりも勢いがつき過ぎていた為に、しりもちをついた時にぶつけてしまった腰骨が、かなり痛い。
パンチラは鉄板のお約束。
でも、そんなことを嘆いている暇は、少女には無かった。
うっすら涙目になりながらも少女は、やはり同じようにしりもちをついてこちらを見ている少年をにらみつけた。

（あれ？　次のセリフ、なんだけ？　えーと、えーと、あぁ…そうそう、思い出した！）

『いっったぁーーーい！　ちょっと、アンタ！　なんでこんな所に突っ立てるのよ！？　通行の邪魔よっ！！』

ビシッと少年に指をさしながらセリフを一息に吐き出すと、少女はくるりと向きを変え、そのまま走り去っていった。

「…なんだったんだ？　一体？」

少年のつぶやきが住宅街にむなしく響いた。

＊

「桜ちゃん、お疲れ様〜」

角を曲がった所で、声を掛けられた。

セーラー服を着た少女がニコニコしながら、ぽんっと、肩を叩く。

「あ、美優ちゃん。うん、お疲れ様〜」

あたしは美優ちゃんの横に並んで歩き出した。

振り返ると、大通りへ続く道の方へ歩く、さっきの少年と、少年と同じ学校の制服を着た少女が並んで歩いているのが見える。

ふぅ。

ため息が、無意識に出た…。

「どうしたの？　ため息なんてついて。まだ始まったばっかりだよ

？」
「あー、そうなんだけどさ、なんか…すでにやる気ナッシングっていうか…」
あたしは思わず本音が出てしまった。
「ほら、あたしの出番って今日からじゃん？　さっき初めて主人公くんを見たわけ。でね、あんまり期待してはいなかったんだけど、実際に見て、やっぱりそんなモンだよね～、とか思っちゃってさぁ…」

この世界はギャルゲーなワケだし、あたしはあくまで脇役。
数人いる攻略キャラのうちの一人でしかない。
主人公になれるのは、『プレイヤー君』ただ一人だ。
で、そのプレイヤー君はといえば…

めちゃくちゃ普通。
平凡。
十人並みの真ん中、５番目。
中肉中背。
デブでもなく、ガリガリでもなく、マッチョでもなく。
どこにでもいそうな感じで…印象にまったく残らない。
そんな『ザ・普通』な、男の子だったのだ。

わかるかな？　わかるよねっ！？　この微妙な乙女心ってやつを！
超イケメンとか期待してたワケじゃない。
でもさー、平均よりちょい上って、重要だと思うのよね。
人間は顔じゃない。顔じゃないけど、顔も重要なのが恋愛なのよ。
特に第一印象においては。

「あたし、パスかもー」
「えー！　決め付けるの早すぎない？　あんな外見でも、いいとこ

ろあるよ。…たぶん…」
「たぶん、ってなによ。せめて具体的な事を教えてよ」
「私もまだ、数回しか絡んでないからなぁー」

美優ちゃんは、テヘッと、笑った。
ちなみに、美優ちゃんは大きな目が印象的な小柄な中学生でプレイヤー君の妹…という設定だ。

美優ちゃんの出番は、今のところ毎朝プレイヤー君を起こす事だけらしく、セリフも『お兄ちゃん、早く起きないと遅刻するよっ！』だけなんだって。
シークレットキャラなので、直接攻略は不可能なのだが、条件次第では変わってくる、らしい。
いまいち理屈が分からないが、ご苦労なことだ。
あたしがこの役じゃなくて良かったと、本気で思ったりした。

「早いところ沙織さんと交代したいなぁー」
「沙織さんって…誰だっけ？」
「幼馴染設定のお隣に住んでる同級生」
あー、あの子ね。思い出した。
「さっき一緒に歩いてた子だ」
「そうそう。好感度が上がると、私の代わりに起こしてくれるみたいなんだよねー」
「へぇー」
「だから、沙織さんに頑張ってもらって、私は徐々にフェードアウトが目的なの」
「なによっ、美優ちゃんだってパス気味なんじゃない！」
「へへへ。ばれたかー」
「はれたかー、じゃないでしょ、まったく！」
「そんな事より、そろそろ移動したほうがいいんじゃないの？　桜

ちゃん、次は教室のシーンじゃなかったっけ？」
「あー、そうだねぇ…。そろそろ行かないとねぇ…」
あたしの設定は、プレイヤー君のクラスに転校してくるドジっ子転校生、山野桜（ゲーム名）
これから教室で
『あーー！　アンタは今朝のっ！！』
という、これまたベタベタな展開のシーンなのだ。
めんどくせぇ。
うんざりしながらも教室に向かおうとした、その時。
携帯端末が鳴った。
え。
いやーな予感がしつつも、端末の画面を見ると…
［　リセット実行　：　シーン３５・台本１３ページ　］
「……」
「……」
あたしと美優ちゃんは固まった。

「シーン35って…どこだっけ？」
「…朝いち。起きる所…から」
「……マジで？」
「……マジでっ！」

「たぶん…登校イベント、失敗したんだろうねぇ」
「で、リセットして朝からやり直しなワケか！」

ふざけんなっ！

と、あたしがいくら憤ったところで、シナリオが進む訳もなく…。

＊

『転校初日から遅刻なんて、絶対いやぁぁぁーーーっ！』

＊

山野桜（ゲーム名）
ギャルゲーの女の子生活、振り出しに…戻る。

Chapter2

『それではこれから体育祭の個人出場種目について決めたいと思います』

教室の壇上で、淡々と議題の進行をすすめるのは、学級委員長の川島千穂。

切れ長の奥二重、メガネのクールビューティーな女生徒で、成績は学年3位だったりする。

『先日提出してもらった希望種目のアンケートを元にこちらで調整しましたが、人数の多かった種目についてはジャンケンで決めます。山本さん、田中さん、金子さん、佐藤さん、あと…秋月さん、前に出てきてください』

名前を呼ばれた生徒は「え〜」などと文句を言いつつも立ち上がる。

そして、最後に名前を呼ばれた生徒、「秋月学」も憮然とした表情をしつつ、ジャンケンをするために立ち上がった…。

＊

あたしは、ぼぉ〜っとしながらホームルームの進行を聞いていた。

さっき転校してきたばかりで、なにこの展開、と思わないでもない。

いや、いいんだけどね。巻きでいこう、巻きで、って感じか。

っていうか、あたしアンケート取ってないし、聞いてないよ。
あ、あたし自身がイベントに関係なければ体育祭にも出なくていいのかな？
などと都合のいい事を考えながら、ふと壇上でジャンケンをしている…アイツに視線を向けた。
「秋月学」という名前も、実はさっき知ったんだけどね。
あたしたちの名前はキャラに付随してる役名なのだけど、主人公の彼の場合は、どうなのだろう？
妹設定の美優ちゃんは役名なのだから、主人公とて同じなのかもな…。
というか、アイツの名前なんてどうでもいいや。
自分に関係のないホームルームは暇だ。
本格的に暇なので睡眠体制に入ろうとしたところで…あたしの名前が呼ばれたのだった。

＊

『桜さんの出場種目は、申し訳ないですが、余っているものでも構いませんか？』

＊

ちょっと！　不意打ちですか、委員長っ！
あったし、自分には関係ないと思って、台本チェックしていなかったんですが！
思わず睨みそうになったのは、仕方ないと思います。

…条件反射だったんだってば。
あたし、主人公くん、狙ってませんってば。
委員長があたしと同じ、攻略キャラだからじゃないって！
あぁぁ、怖いよ、睨み返すのはやめてくださいっ。
なんか…もしかして委員長に敵認定されたっぽいの？
譲るよ、譲るっ！
あたしは元々やる気無しだし、強制イベントだけ参加予定なんですよ一応自分的にはね。
だからお願いっ、氷点下まで下がりそうな冷たい視線はやめてぇぇーー！

あたしは慌ててコッソリと机の下で携帯端末を開き、セリフを頭に叩き込んだ。

＊

『はい、構いません。でも運動は苦手なので…なるべく楽な競技がいいです』
『では「障害物競走」か「二人三脚」ですね。桜さん、沙織さんと、ジャンケンで決めてください』

学級委員長の言葉に、二人の少女が立ち上がった。
ジャンケンぽん！
結果は…。
『では…障害物は沙織さん。二人三脚は桜さんに決まりました』

学級委員長は黒板に名前を書いてゆく。

二人三脚の欄には、「秋月学／山野桜」と書かれていた。

＊

は？
何故に？
……。
そっか。
あたしは途中参加だし、とりあえず一回くらいは絡んでおこうかなって事ですかそうですか。
で、選択を幼馴染の沙織さんじゃなくて、転校生のあたしにしたのね…。

ひぃ～。
沙織さんも睨んでるよ！　委員長も睨んでるよ！
なんで二人ともそんなに、やる気なのさ。
うぅ…泣きたい。

＊

『えーと、秋月くん？　私、走るの苦手なんだけど、とりあえずよろしくね？』
「うん。俺も運動は得意じゃないし。こちらこそよろしく、山野さん」

＊

山野桜（ゲーム名）
強制イベント「体育祭」において、パートナーに選ばれる。

リセットは…してくれない、らしい。

背後から突き刺さる、二つの視線がマジで痛いです。

Chapter3

放課後。
主人公くん@秋月学氏は、あたしの視界から消えた…というか、教室から出て行った。
おや？　どちらへお出かけですか？
あたしは携帯端末を引っ張り出し、確認する。

ちなみにこの端末は、アイツを除く、出演者全員に渡されているもので、台本でありシナリオであり、進行状況の確認や連絡事項に使われるものだ。
アイツが動くたびに、台本がどんどん変化してゆくんだって。
まだ彼の物語は始まったばかりなので、それほど大きな変更はないはずなのだが、細かなチェックは欠かせない…。

今後の彼の予定をチェックしてみると、
・部活で…奈々子先輩（部活の先輩かぁ。まだ会った事ないな～）
・下駄箱で…由貴ちゃん（って誰だ？　会った事ない人その2だねぇ～）
・帰り道で…沙織さん（幼馴染さんは出番も多くて大変だなぁ…）
と、なっている。

って事は、あたしの本日の出番はようやく終了したって事で良いんだよね。
机に突っ伏しながら眼を閉じる。
疲れた…。

マジで疲れた…体力的にも精神的にも。

「桜さん、お疲れ様？」

頭の上から降ってきた声に反応して反射的に顔を上げてみれば、そこにはメガネの美女が微笑を浮かべていた。

「あ……委員長…」

思わずガタッと椅子を引きずってしまったのは、あたしの防衛本能のなせる技であって、委員長さんに何か思うところがあるとか、そんな事ではないのですよ？　むしろ美人さんは自分、大好物ですから。でもやっぱりちょっと怖いと思うのは、先ほどの視線の冷たさを思い出したからで…。

「あのっ！　先ほどの事は不可抗力っていうかっ！　あたしのせいじゃないと思うんですが！」

あぁ、思わず卑屈になってって言い訳しちゃうのはあたしの昔からの悪い癖なんだけど。長いものには巻かれるっていうか、流されるっていうか、典型的なその他大勢根性でホントゴメンナサイ。

「そんな事を言いたいんじゃないのよ」

あたしのセリフに委員長さんはちょっと面食らったようだったけれど、キッパリと言い切った。

「私も最初はこんな世界に飛ばされて頭にきたし、嫌だった。でもね、こうなったら早く終わらせたいって思うようになったの。で、

さっきのあなたの態度にちょっと腹が立ったのは事実。……だから…、」

委員長は、ここでいったん言葉を切ってあたしを真正面から見据えた。

うっ…。

何でしょう？

沈黙が重いですよ。

美人な委員長に見つめられてちょっとドキドキしてますよ。

え、このゲームってこんな裏フラグもありなんですかっ！？

…なんて、あたしはバカな事をつらつら考えていた。

「あなたがやる気がないのは別に構わない。でも私の出番の時はきちんとやってくれないと困るの。いいかしら？」

委員長っ、笑顔が怖いです。

イエッサー！

ラジャー！

了解でありますっ！

あたしはコクコクとバカみたいにうなづく事しか出来なかった…。

そうか。

あの氷の視線は、無言の非難だったのか。

委員長の言葉を信じるなら、彼女はこのゲームのエンディングを早いところ迎えたいわけで、その邪魔は許さない、という事なんだろう。

あれ？

そもそも、このゲームのエンディング条件って…なんだっけ？
最初にこの世界に飛ばされた時に聞いたような気もするんだけれど、覚えてないや。

なんか…重要な事だった気もするんだけれど…。

山野桜（ゲーム名）

初日の出番、無事に終了。
明日の台本を（委員長が怖いから）今からチェックしますよっ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2017r/

ギャルゲーの女の子になりました

2011年3月30日20時22分発行